

## 老人学校と老人大学の開講（一九七二年～）

殆どの入院患者さんは、リハビリを受ける時間以外は、何もしない、隣の人と話もしないで、ただぼーと時間を過していらっしやるようでした。

たった一回きりのやり直しのきかない人生なのに、そして、過ぎ去ったら永久にとりもどすことのできない大切な時間なのに、無駄に捨てて顧みない姿を、私はとても見ていられませんでした。

一日を大切に、そして、楽しく生きがいのある日々を過していただきたいと考えた私は、まず、なるべく多くの患者さんが楽しめる院内放送をしようと考えました。

年をとるとともに楽しめるものはみんな違ってきますから、ひとりひとりの患者さんに、楽しみは何ですかとか、今何をやりたいですかと、尋ねてまわりました。

そうしましたら全く意外なことに、書道をしたい、手芸をしたい、本を読みたい、散歩したいと、様々な希望が出されましたので、早速、毎日午後二時から老人学校と称して、患者さん達に会議室へお集まりいただいて、私や職員達が古今東西の名曲鑑賞、小説や詩の朗読、英会話などの授業を始めました。この外、宗教講話や詩吟は、ボランティアの先生にお願いして、それぞれ好きな授業を受けていただきました。

会議室の授業に出席できない患者さんのために、その模様を院内放送で流しました。

それだけでなく、絵画、書道、手芸、パッチワークなどを希望されるみなさんのためには、ボランティアの先生方にベットのサイドを回りながらのご指導をお願いしました。

数ヶ月に1回位、患者さんの作品展覧会を行って、みなさんに見ていただきました。

お天気の好い日には、近くの公園へそろって散歩に行き、春や秋には遠足と称して、向山公園や豊橋公園へ、お弁当を持って出かけました。

やがて、「体が不自由になって、何度死のうと思ったか分からん。」とこぼしていらっしやった患者さんが、アイデアたっぷりの作品をどんどん作られるようになって、展示会の主役になられましたが、この方だけでなく、老人学校を始めてから、多くの患者さんが目覚ましい病状の回復を示されるようになられました。

更に、老人学校ではあきたらない、もっと、しっかりと勉強をしたいと訴える患者さんまでが出てきましたので、愛知大学の教授を始めとして、市内外の学識経験者に、大学レベルの講義をしていただくための、老人大学を毎週木曜日の午後、開講することにしました。

折角の講義なので、院内の患者さんだけでなく、向学心に燃える町のお年寄達にも参加していただこうと考えて、大学を広く開放しましたら、噂が瞬く間に広がって、市内の各地からだけでなく、浜松や新城からも、講義を聞きにいらっしやるほどになりました。

最初の講義は、愛知大学学長の久曾神教授に、「万葉集と三河」についてしていただき

ました。現在、さわらび大学として活動しています。